

文章を書くための企画ができたら、次は情報の入手です。テーマにそって書物などから知識を取り入れたり、実際に人に会って、生の声を聞いたり。あるいは現場に足を運んで、新鮮な感覚を養うなど、いい情報を得るためには、地道な努力が必要です。情報を入手するための大事なポイントをまとめていただきました。

情報の上手な取り方とは。

前回は、いい記事を書くためには「いい企画」が必要だということを書いた。

企画を練りに練った上で主題が決まったら、さて、いよいよ取材に入る。

①まずは資料を集めること。

いまはインターネットでかなりの情報を集めることができる世の中だが、図書館、博物館の重要性は変わらない。本、新聞、雑誌から得る情報は多ければ多いほどいい。小さな円を描いてその円に沿って穴を掘るときは、浅い穴しか掘れないが、広い円を描いて穴を掘れば深くまで掘ることができる。情報の深さも同じだ。一見ムダと思える情報でも手広く集めておく。情報を分析してゆくうちにムダと思えた資料が生きてくる場合がある。

いまは、その図書館にない本でも、他の図書館から取り寄せてくれるサービスが行き届いている。図書館の賢い利用法を身につけることは、あなたの将来にきつと役立つ。

の参考にはなるが、実際に書くときは、この

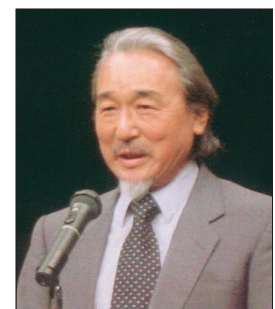
資料の内容を超えていなければならない。既成の資料をつなぎあわせて文章をこしらえるだけでは、新鮮な記事は生まれない。

②インタビュ

だれかの話を聞く場合は、要件を明確に告げて面会をお願いし、会いに行く。ただ漠然と会うのではなくて、十分な予備知識を身につけ、たくさん質問を準備しておく。相手の大切な時間をいただくわけだから、短時間で実りのあるインタビューができるよう、準備は念入りしておく。話を聞いたあと必ず礼状を書く。新聞ができあがったらそれを送る。これも、最低の礼儀だ。

③現場に行く。

昔、ニューヨーク特派員をしていたころ、ニューヨークタイムスの編集局長と昼食を共にする機会があった。「いま、新しい東京特派員を探している。いい人がいたら紹介してくれ」と局長がいう。「たとえば、日本の人



●たつの・かずお
朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。

が朝はどんな食事をし、どうやって通勤しているのか、ということが読者にありと目に浮かぶような記事を書いてくれる記者がいいる。そんな話だった。タイムスといつても外交、政治などの難しい話ばかりではない。各国の人の暮らしがわかる記事も少なくない。そして「現場」を大切にした記事こそが人に強い印象を与える、という思いが局長の言葉からうかがえた。

「学校紹介」でも現場で取材した記事が多い方が望ましい。たとえば「校庭の雑草」「校庭の樹木」という主題でたくさん草木を観察する。雑草は排除すべきものと思っっている人が多いだろうが、よく見れば、そのたくましさ、その可憐さに心打たれる人も多いはずだ。現場では、常に新しい発見がある。なぜ自然を見つめることが大切なのか。一輪の花、一本の木の命と交流することは、あなたの「驚きの感覚」を磨くことになる。驚きの感覚は常に、ものを書くときの基本だ。